# 童

20121.3、16

昨年秋に植えた子どもたちのチューリップが可愛い芽を出したのもつかの間､また雪の下にもぐってしまいました。春と冬が力比べをしているような毎日です。卒業式　旅立ちの季節を迎えていますが、名残り惜しく、なかなか離してくれないような気分です。今年は、まさに、冬からの旅立ちになりそうです。

子どもたちにとっては、魅力的な雪遊びが最後までたっぷり楽しめて満足だったでしょう。それも、べたべた雪ではなく、サラサラの雪。なんと言っても、今年は、新しい雪遊びの場所を発見したので、そこにほぼ通い詰めていました。同じ場所で地形が複雑ですから、遊びの世界が行くごとに深まります。飽きることなく、かまくら、そり、おしりすべり、雪遊び、とにかく何でも楽しめる場所。しかも、大地からすぐの場所ですから、２０年間、未知の場所だっただけに、本当に感激でした。

こんな 3 学期を雪遊びでたっぷりすごし、1 年間が幕を閉じようとしております。1 年間、いろいろご協力、ご理解ありがとうございました。今年は、①えほんわらべうた②食③野外自然活動の 3 つをテーマに、スタッフは、精一杯取り組んでまいりました。最後まで、毎日のわらべ歌や絵本、そしてスタッフ全員のおはなしや人形劇への取り組み、毎週の給食、そして、確実な外遊びなど、初志貫徹できた充実感は、いっぱいです。「苦労なくして充足感充実感なし」。これも一重に、皆様方の暖かい励ましやご支援、ご協力の賜と心より感謝申し上げます。

# 【いいお父さんお母さんを育てる】

「子どもは家の労働力、牛馬の如く、食べ物は、まず親がいい物を食べて、残り物は子どもに与える」「お土産などの美味しいものも、親が食べて、子どもにはあげない」「腹だけを満たせば、毎日 365 日同じものを食べさせている」「2，3 日前の腐った弁当を平気で準備する」「とにかく親に慈愛がない国民性と文化がある」「こんな中で育つ子どもは大人になると、同じような親になる」

**「私は、このサイクルを打ち切り、いいお父さんお母さんになるように育てたい」**

「中学生の時、飲んだくれて帰ってくる父親から母を救おう、離婚させようという目的で、家出した。年齢を 2 つ偽り、大阪の木工所で働いたが、家出捜査ポスターで発見された。家に連れ戻されようとしたが、裁判所へ行き、両親離婚しないと戻らないという条件をだし、離婚を成立させた」

「母子で苦労する母親を助ける、そして、その原因を作った自分の責任を課すために、それから１０年間、朝 4 時に起きて、新聞配達を 24 歳までやり続けた。年 2 回の休みのみ。手が凍りつき、新聞をつかめないので、工事現場の電球で温めながら配った。今の私があるのは、このお蔭です」

「高校の時、ベトナム戦争勃発。アメリカ側についていた日本にもベトナムの惨状の責任があると感じ、ベ平連に加入して、その後、日本人としての償いの気持ちで、ベトナムへボランティアに行っていた」

「夜間の大学を卒業して、公務員になり、児童施設で保育士のような仕事をしていたが、事務職に転勤になり、退職した。子どもの専門的な教育はできないが、ご飯を食べさせたり、着替えさせたり、生活を共にすることならできるからと、その当時、マイナーであったアフリカ、それもケニヤに行って、孤児院をやろうと決意した。何のコネもないまま、まずロンドンで英語とスワヒリ語を学びながら、大使館に勤務でき、そのつてでケニヤ、そして現在のウガンダに渡った」

「以来、30 年　ウガンダの公共育は、冒頭の通り、先生と言えども、まず自分中心で、子どもたちは牛馬の如くの教育をしているので、政府の援助を受けないで、自分が 3 か月日本で 100 万円位日雇いの夜間警備などで稼いでそれで賄っている。ちなみに、日本と比較して、賃金等は５０分の１　しかもガソリンはもっと高い」

「私たちの学校は、4 歳から小 4 年まで、通いが 3 分の２、寄宿舎が３分の１であり、もちろん、親に捨てられた子やエイズ孤児もいる」「わいろがはびこっている国において、日本人ということでお金目当てで言いがかりをつけられ、裁判や拘留されて、わいろを渡さなければ、１年間刑務所生活になる怖れがあっても、絶対わいろをわたさなかった」」

**「ここで慈愛あふれる教育、生活を体験させ、将来、いいお父さん、お母さんになってほしい、そんな父母に育てるのが私の務めです」**

年の頃は６０歳。世界一周してきた長男が、この学校で１ヵ月ボランティアをして強烈な印象を受け、その半端でない生き方に感動し、子どもに対する厳しさと優しさを学んだと、興奮して連絡してきた、その人物である。
また、子どもたちと別れ際に、長男は、「恥ずかしくない精一杯の生き方をする」と言ってきたらしい。それは、今度会う時に「自分が胸を張って会える自分でありたい」からという意味らしい。

その人物が、日本への出稼ぎ帰国の機会に、東京での自転車調達のリクエストにお答えして、折りよく、東京へ自転車を持って行って、先日初めて出会った。開口１番「雄飛さんは、年間８０名を超すボランティアの中でも、際立った青年でした。どうしたらこんな青年に育つのか、ぜひ、お父さんお母さんにもお会いしてお話を聞きたかったです」とおっしゃって下さった。そして、さすがに行動力の人で、その２日後、事務局のスタッフと大地へ来て下さり、いろいろな話をしてくださった。それが、冒頭の話である。

私たち夫婦の子育ての話などを交えて、ウガンダの３０年の自分の教育と照らし合わせたりして、いろいろ話で盛り上がったが、その基盤には、キリスト教が植民地支配の道具とされてきた経過やそれにより形成されてきた文化・習慣などの深層があることを認めながらも、真摯に一生懸命、一途に生きているその姿に、心が打たれた。それは、口先だけでない、その人物の深い不屈の精神と思い、願いが十二分に感じられた。
久しぶりに、実体の伴う半端じゃない生き方の人物との出会いであった。この人物なら、長男がほれ込むのは間違いない。「お父さんに共通しているところがあるので、きっと話が盛り上がると思うよ」と、その人物が今長野に来ているよと、現在京都にいる長男に話すと、すごくうれしそうに話してくれた。　食生活の貧しさを聞いていた娘も、話に加わり、「ののちゃん、あなたもアフリカに来てくれる運命を感じます」と言い残して帰って行った。ソロモンに続いて、娘も興味を持ったらしい。家族にとっても、素晴らしい人物との出会いであった。

この人物には、子どもが３人おり、１番下の娘は６歳。ソロモンを変革できる人物に育てるために、日本の教育を来年から受けさせる希望があるらしい。ウガンダとタンザニアは隣国同士。偶然にもサンクゼールのﾌｨﾃﾞｨｱさんをご紹介して、話が盛り上がった。
「私たちは孫を育てている」という大地の方針と、「将来のいいお父さんお母さんを育てる」はまさに共通です。